

生存科学研究 ニュース

VOL. 8. NO. 2. 1993. 3. 10. 発行

発行、財団法人 生存科学研究所

〒104 東京都中央区銀座4-5-1

聖書館ビル 303

電話 03-3563-3518

第5回東西の健康観・医・業研究会 地域医療の中での伝統医学

1月14日(木)午後2時より、第5回「東西の健康観・医・業」研究会が開催され、表記のテーマで、東邦大学公衆衛生学教授豊川裕之委員とドクターズ・オピニオン代表立川幸治委員により報告がなされた。

豊川氏は「東西の地域医療」と題し、日本民族衛生学会の事務局を担当している立場から「民族」に対する最近の見方を紹介。マルキシズムが解体しつつある現在における「普遍」に対する「民族」の積極的意味合いについて述べた。「地域」は様々に定義でき「東西」という分け方にはあまり意味がないとし、氏の東北地方の実践的地域医療活動の経験から、すべての医療サービスは、その地域の文化的価値体系を尊重しつつ進めなければならないことを強調した。

立川氏は現在の日本においては地域差よりもむしろ世代差のほうが大きいのではないかと前置きし、「ハイテクと地域医療」と題して、CT、MRIなどのハイテク医療機器が急速に発達し、それが日本で世界一のスピードで普及し地域医療が重装備となっていることを示した。ついて、ハードの進歩に対しそのユーザー側のソフトが追い付いていないことを指摘し、医療資源全体としての合理的利

用に対する経済的イニシアティブが必要であるとした。

世界の中での「民族」「部族」や「国家」の関係、その中での伝統医学のあり方、ハイテク機器に対する国民の見方、途上国と日本とでの極端なヘルスサービスの格差、日本の開業医の将来、など、多方面の論議がなされた。

第2回 環境・保健・産業研究会 環境と健康

1月22日(金)午後3時30分より、第2回「環境・保健・産業」研究会が開催され、表記のテーマで東京大学医学部助教授松原純子女史の発表が行われた。

女史は、環境と健康の問題を人間的にかつ科学的に考えたいと志し、生態学の研究をしてから再び医学的に健康面からの研究に取り組んだ、と自分の研究経歴を披露した後、疫学が伝染病の原因追及のような単一原因の追及から、癌の原因のようなライフスタイルの全般にかかわる多因子の影響を研究するようになったこと、リスク(危険の可能性)定量化の研究の必要性、寿命損失を表わすリスクの単位[人・年]等を紹介し、また、リスクに対する生体側の防御機能への関心を喚起したうえで、健康リスクを科学的政策の基盤と

するために、リスクの発生、環境への影響、生態系を経て人間への影響の全ての段階の管理の必要、そのためには常時データを収集しておくことの必要、リスク管理の人材養成の必要等を強調し、「持続可能な開発」は矛盾だと思ったが、企業人の認識が高まり、部分的には可能な時代になった、と述べた。

次いで、ラットにカドミウムの投与やカルシウムの減量投与等の前処置をすると、放射線暴露による死亡率が減少するという自らの研究結果を紹介しながら、フリーラディカルの発生というリスクに対する生態防御機構とそれに関与する物質、生態防御機構がライフスタイルにより影響されることを説明した。最後に、環境と健康の総括として、人口爆発で環境破壊が進む今、環境と人間の自律的調整システムが必要である、と結んだ。

第4回 生存秩序と人間関係研究会 遺 伝 子 を 探 る

1月27日(水)午後6時より第4回「生存秩序と人間関係」研究会が開催され、国立小児病院先天異常研究部部長山田正夫氏が表記のテーマで発表を行った。

氏はまず、分子生物学の発達を概観し、特に1980年以降の急速な進歩をもたらした各種のDNA解析技術を取り上げ、遺伝子を単離し増殖するクローニング、そのためにDNAを切断する酵素(制限酵素)、DNAを繋ぐ酵素(リガーゼ)、DNAを増やす情報をもったDNA(ベクター)の挿入によるDNAの複製等の技術について説明を行った。

ついで、DNAの多型について説明し、それを調べる技術、多型の出現、多型を利用した個体の判別、PCR法によるDNAの増殖法、それをを用いたハンチントン病遺伝子の研究、人遺伝子解析のプロジェクト等を披露した。

最後に、最近の遺伝学的癌研究に触れ、優

性オンコロジーと劣性オンコロジー(癌抑制遺伝子とも言う)などを紹介した。

発表後の討議では、遺伝学的に、個体は発生のどの段階で特定できるのか、記憶にさいして脳細胞内で遺伝子が関与するといわれている話題、「生存の理法」と遺伝子にかかわる秩序、遺伝子と「不安定の安定」の問題、等が話題となった。

第4回 医薬問題研究会 精 神 神 経 疾 患 と 治 療 薬 へ の ア プ ロ ー チ

2月15日(月)午後3時より、第4回「医薬問題」研究会が開催され、東京医科歯科大学薬理学教室大塚正徳教授が表記のテーマで発表した。

氏はまず、ニューロトランスミッターは薬物として殆ど全て役に立つが、研究は必ずしもその面から進められたというわけではないことを指摘し、しかし、今後は、例えばH₂ブロッカーの例のように、内因性活性物質から治療薬開発を志向する方向にアプローチが進むであろう、と前置きした。

次いで、アミン系(アセチルコリン、カテコールアミン、セロトニン)、アミノ酸系(GABA他)、ペプチッド系(タキキニン、エンケハリン)その他の神経伝達物質を概観した。氏の研究の中心は、このペプチッド系の神経伝達物質であるが、現在その数は50を超えるであろうと考えられるようになっている。

さらに氏は、神経伝達物質以外の薬物の研究から偶然に神経伝達物質との関わりが発見された幾つかの例を紹介しながら、カテコールアミンおよびセロトニンに関わるMAO inhibitors、抗うつ薬、抗精神病薬、パーキンソン治療薬他、GABAに関わるベンゾジアゼピン他、ペプチッドに関わるモルヒネ他、等々の内因性物質の治療薬としての開発過程を説明した。

最後に、脳機能改善薬としてのカフェインや脳血流改善薬の効果と並んで、脳機能の改善には、人間行動学に基づいた教育が最も有効であろうことを指摘し、また、脳神経変性の回復や、研究への取り組み方としての Systematic searchと serendipity等、最新の話題にも触れた。

発表後の討議では、欧米に比べて日本の医薬品開発には、薬理学者の参加は少なくないが専門的知識を持った医師の参加が少ないこと、その必要と人材の不足等が話題となった。

会員研究会「生存と経済」第5回
医療サービスの価値と医業経営

2月25日(木)午後2時より、第5回「生存と経済」会員研究会が開催され、元日大医学部長、日大名誉教授三宅史郎氏が表記のテーマで発表を行った。

氏は、医療は医学の成果の社会ニーズに応じた適用であり、医師はその媒介者であるが、意識的自覚をもった媒介者でなければならない、と前置きしてから以下のように述べた。

医療の効率性を言うと兎角臨床家はそれが医療費抑制のためのもので、医療の質を落とし、医療の本質に反すると考え易いが、必ずしもそうではなく、医療の質と効率化とが矛盾なく成り立つことがある。例えば、病因分類と重症度分類を整備したうえで、同一重症度の胆のう炎入院患者について、色々な病院の一件当たり医療費を調べてみると相当なばらつきがあったが、中で特に一件当たり医療費の低いある病院では、一日当たり医療費が他をぬき込んで高く、入院日数が少なく手術料で高くなっていることが分かった。この病院はベッドの回転率が良く、経営的にも良い状態にあり、医療の効率も良く同時に質も良いといえる。

統計的分析を加えたこのような問題の研究

を臨床疫学というが、その研究により、臨床家にこのような問題を理解してもらうことが大切であろう。

発表後の討議では、病院の収入面からだけでなくコスト面からの分析、患者の立場からの効率化という視点、プライベートな意欲の育成、医療効果と経済効果の両方の効率化が得られるシステム、医療保険制度導入時と現在との状況の変化への対応の切り替え等々の必要性、中医協のあり方、日本の医療費抑制のあり方に問題があるのではないかと、等の議論がなされた。

九州プロジェクト 肝属研究会

1月21日(木)午後3時より、研究所会議室において九州プロジェクト第4回肝属研究会が開催された。今回は、新潟県新発田市医師会川井和夫副会長を招いて、2市10町村にまたがる新発田地域の地域医療・保健活動についての発表を聞いた。

新潟県新発田市、豊栄市ならびに10町村を擁する北蒲原郡は、以前から医師会の地域保健活動が活発なところであり、昭和35年に始まる医師会検査センター、48年からの休日診療所等、行政との協力も極めてスムーズにいったところであるが、それ等の実績をもとに、新発田市、豊栄市、北蒲原郡の10町村の自治体と医師会が協力して公設民営(医師会による運営)の財団法人「二市北蒲原郡総合健康開発センター」を設立し、57年から事業を開始している。そこにおける、開業医の全面参加による専属医師を持たない検診やドック、隣接する社会福祉センター(通称ボランティアセンター)の一部を借りての老人訪問看護ステーションの開設(近々始まる)等、その活動の積極的あり方やリーダーシップのあり方、行政と医師会の協力のあり方等が注目される。

4町を活動範囲とする肝属医師会の地域保健活動にとって、多数の自治体との関係、立

地条件の類似と、人口規模の差など、新発田地域との各種条件の異同から、どのような所が進め易いか、どのような所に困難があるか、今後の施策検討、推進に大いに参考となった。

東北プロジェクト 安家研究会
安家の明日を考える会

平成4年11月28日、岩手県岩泉町安家で行われた研究会は、安家の住民を中心に「安家の明日を考える会」として毎月続けられることとなった。毎回小泉浩郎生存研会員が出席して協力している。

11月は小泉氏の著書「むら」を題材として討議し、「なにが安家にあるのか、なにが残っているのか、それを生かす方法を考えよう」と結論された。

12月は19日に、平成5年1月は30日にそれぞれ研究会が開催され、色々な地方、地域の実例の紹介があり、また、平成5年度の農業・林業の新規事業や補助事業等の具体的問題が検討され、参加者の所属する団体相互の連携の必要性が強く認識された。次回は、「安家の子供をどう育てるか」という教育問題が討議される予定。

生存科学シンポジウム
についてのお知らせ

今年の「生存科学シンポジウム」は平成5年の初夏に行われる予定となりました。

これは昨年暮、生存科学研究所西日本センターの本格的活動開始に際して大阪で「西日本シンポジウム'92」を開催したことに関連して、東京での開催時期を調整したことによります。

十分な準備期間を得て例年より更に充実したものになります。ご期待下さい。

研究所日報

- 1月 7日 (木) W. レオンチェフ教授との
共同研究協議
- 1月12日 (火) 副理事長会議
- 1月30日 (土) 東北プロジェクト
打ち合わせ
- 2月 2日 (火) 常務理事会
- 2月12日 (金) 日米会議
- 2月13日 (土) 九州プロジェクト別府訪問
- 2月20日 (土) 同 別府研究協議
- 2月22日 (月) 編集小委員会
- 2月28日 (日) 安家の明日を考える会

ハーバード大学武見講座活動報告

報告者 吉田フェロー

Takemi Program Seminar

- 1/ 4 Issues Related with High Titer
Vaccine Against Measles
/ M.Garenne
- 1/11 Occupational Health in Developing
Countries / D.Christiani
- 1/25 Understanding Political Problems
in Africa / D.Obikeze
- 2/ 1 Fiscal Crisis and Health Policy
Strategies / C.Possas
- 2/ 8 Public Health Approaches to the
Control of Violence / F.Earls

Takemi Luncheon

- 1/ 7 Weekly Luncheon
- 1/14 Research Update / T.Yoshida
- 1/21 Weekly Luncheon
- 1/28 Weekly Luncheon
- 2/ 4 Research Update / M.Prakasamma
- 2/11 Weekly Luncheon
-